

齋藤 吉彦（さいとう・きちひこ）

1、プロフィール

昭和4年頃わが国の民俗学の開花期に、始祖柳田国男の影響を受けて民俗学・言語学を志し、大いに将来を嘱望されたが、学半ばで肺結核で倒れてしまった、若き学究。

<生没>

1904(明治 37)年2月 10 日 ~ 1930(昭和5)年 12 月 15 日

<代表作>

遺稿集『那妣久祁牟里』

<青森との関わり>

弘前市生まれ、旧制弘中から慶應大学に進み、民俗学を志して郷土の風俗・言語を研究したが、学半ばで夭折した。

2、作家解説

民俗学者。明治 37 年に父忠七、母つるの長男として、弘前市元寺町 35 番地に生まれる。父の経営する齋吉旅館は第八師団の御用宿として、市内でも一流の旅館であった。大正5年に県立弘前中学校に入学し、従兄の齋藤吉郎やその友人山鹿十郎の影響で文学に親しみ、森鷗外、永井荷風、木下杢太郎、芥川龍之介、齋藤茂吉等を読む。同時に弘前女学校の主任希教師M・ヘレン・ラッセル女史について英語を学ぶ。大正 10 年3月には慶應大学理財科(経済学部)予科に進む。既に2月より吉郎・山鹿達と回覧雑誌を発行して詩や訳詩、随筆、評論などで多才ぶりを発揮していた吉彦は、大正 13 年3月に予科を卒業するや父の意見で仕方なく在学していた理財科を辞め、母の口添えで晴れて文学部本科仏文科に転科する。そこで吉彦は柳田国男、折口信夫、西脇順三郎、広瀬哲士などに学んで、民俗学や言語学上の強い影響を受けることになった。学外では、福土幸次郎の地方主義から感化を受けて、民俗学研究に心血を注ぐようになる。一方、

アテネ・フランセや東京外語大夜間部に通って勉強し、卒業時には成績優良でフランス政府からメダルを贈られ、同時に慶應大学文学部助手となり、予科講師を兼任して仏語を担当した。フランス留学も約束された。

吉彦の民俗学・言語学の研究は主として卒業後の昭和2年から亡くなる昭和5年までのごく短い間で、県内各地を探訪して「津軽土俗方言考」(昭和3年)「津軽謎々の分類」(昭和4年)「津軽方言音韻考」(未定稿)「上磯風聞記」(未定稿)などを精力的に書き、大いにその将来が囑望されたが、不幸にも病にとりつかれて昭和5年12月15日業半ばで亡くなった。葬儀は弘前市西茂森町の宝積院で、本人の希望により神式で執り行われた。法名は智学院文質英藻居士。

翌昭和6年2月15日、一年祭を記念して関係者が集まり、故人の業績を偲び、遺稿集『那妣久祁牟里』を刊行。昭和25年には蔵書の一部を弘前大学文理学部に寄贈した。

3、資料紹介

○『那妣久祁牟里』

図書

1931(昭和6)年2月15日

177 mm × 123 mm

「鶏助雑記」と「那妣久祁牟里」の2篇の原稿を、吉彦自筆のものをそのまま写真版とし、和綴本にしたもの。巻末に西脇順三郎その他の追悼文が付いている。師の柳田国男が早逝した愛弟子の死を悼んで、関係者に呼びかけて刊行したものである。